

みおしえ



市川陽山謹



法然上人

埼玉教区浄土宗青年会

信機（しんき）

表紙のご上人しょうにんをご覧になって、お名前をすぐに浮かべられた方はいらっしゃるでしょうか？このお方は、浄土宗をお開きになった法然（ほうねん）上人です。法然上人は、お釈迦様がお説きになった膨大な仏教の中から念仏の教えを選び取り、人々に広めてくださった方です。その法然上人のお言葉の一つに

初めには我が身のほどを信じて、

後には仏の願を信ずるなり

というお言葉があります。ふつうに読めば自分のことを信じて、それが出来たら仏様のことを信じなさいと読めるかもしれません。しかし、そういう意味ではないのです。このお言葉は、まずは自分がどういう人間なのかを良く見つめ、自分とはどうゆう人間なのかが本当に解ったならば、仏様の願いを信じなさいということです。

表題の「信機」の機という字は、自分自身のあり様さまの事を意味しています。仏様とは私たちの御本尊である阿弥陀様のことを意味していますが、阿弥陀様は、全ての衆生（しゅじょう）を救い取ってくださる仏様です。衆生とは私たちのことですが、阿弥陀様は本来ならば煩惱を持ち、救われ難いはずの私たちを、いつでも救いたいと願ってくださいます。しかしながら、私たちはなかなかそのことに気付くことが出来ません。なぜなのでしょう？それは私たちが一番解っているはずの自分自身のことを実は少しも解っていないからなのです。

鎌倉時代の話しになりますが、熊谷次郎直実という豪族は、現在の埼玉県熊谷市周辺に勢力を持っていました。平貞盛の末裔ではありましたが、源頼朝に従って、平家訂伐の時に数々の武功をたてて、「坂東一の剛の者」とうたわれた武将でした。しかし、多くの戦の中で心ならずも自分の子供と同年代の少年の命を奪わなければならぬことに出会い、世の無常を感じ出家し、蓮生（れんせい）と名乗るようになりました。教えを求め上洛した蓮生は、法然上人の庵室おむに赴いて、その教えを問いました。

その時法然上人が、「犯した罪が軽かろうと重たかろうと、ただひたすらに念仏さえ申したならば、必ず極楽に往生できます、その他に何の難しい事はありません。」と仰せられると、蓮生はさめざめと涙を流して泣くばかりだったのです。何を泣いていられるのかと尋ねる法然上人に、蓮生は「私のような戦いに明け暮れた罪深い者は、手足をも切り離し、命をも捨ててこそ後の世は仏に救われるであろうと思っておりますのに、ただ一筋に念仏さえ申すならば、往生することが出来ようとやさしく教えて頂いたので、喜ばしく涙にむせび泣いてしまいました。」と、胸の内を明かしました。後生の事を真剣に考えている蓮生の気持ちを察せられた上人は、「仏教の知識を全く持たない罪深い人が、ひたすらに念仏を申して往生できるという事が、総ての人々をお救い下さる阿弥陀様の本願なのです。」と申されて、本願念仏を疑いなく信じる心得をお示しになられ、蓮生はそれを受け入れたのでした。この出来事は蓮生が、深く自分のことを見つめ、そして見つめ究めたからこそ信心を得られた話といえます。

法然上人が浄土宗をお開きになってから830年ほどがたちました。科学や医学などは当時とは比べモノにならないほど発達したことは誰でもが想像が付くことでしょう。しかしながらその分、私たちは科学的に証明されたモノしか信じる事が出来なくなってしまったのではないのでしょうか。自分のあり様さま（「身の程」）を科学的に証明してくれる便利な機械はありません。自分で見つけていくしかないのです。それには「南無阿弥陀仏」とお念仏を申し、阿弥陀様のみ光に照らし出され見えてくる本当の自分を見つめていくことではないのでしょうか。きっと、今まで気が付かなかった自分の至らなさや、邪な気持ちに気付いてくることでしょう。それが「信機」なのです。その時に私たちは、蓮生と同様に素直な気持ちで阿弥陀様のお救いにすがれる様になるのです。

発行者 埼玉教区浄土宗青年会

会長 渡辺 昭彦

編集長 益良 龍雄

用語解説

五重相伝会

ご じゅう そう でん え

五重相伝会とは、私たち浄土宗のみ教えの中心である「お念仏」を正しく理解し、磐石な信仰生活を確立するために行う行事です。いわゆる三回忌などの年回法要や、施餓鬼会などは、施主が故人へ追善の志をもって行う法要であるのに対し、これは施主がみずからの信仰確立の為に、行う行事です。即ち、信者さん自身の為に、お念仏の教えを授かる為の「修行」ということになります。その教えを、5つの過程（五重）を通して理解して参ります。その一番最初（初重）になるのが、今回の「信機」なのです。

実際の期間は、概ね五日間に渡って行うことが多いようです。参加することで、自分自身の揺るぎない信仰へとつながっていくはずです。関東ではあまり盛んには行なわれておりませんが、開延される時には、是非ご参加なさることをお勧めいたします。